

【調査報告】

宜野湾市・大山の生物文化多様性－宮城邦治さんの話

盛口 満

はじめに

1960年代以前、琉球列島の人々の多くは、身近な自然環境を多様に利用する暮らしを送ってきた。また人々のそうした働きかけは、人里周囲の自然環境にも大きな影響を与え、いわゆる里山的環境を作り出してきた。しかし、1960年代以降、人々の暮らしは大きく変わり、人々が持っていた伝統的な自然利用の知恵は忘れられつつある。また、人里周囲の自然環境も、かつてとは姿を大きく変えることとなった。近年、持続的な自然利用の重要性が認識されるようになってくるとともに、人々と自然の相互の関係性－生物文化多様性－の重要性も認識されるようになってきている。しかし、琉球列島における生物文化多様性については、まだ知見が十分に蓄積されているとはいえない。

著者はこれまで、主に植物利用を中心とした自然利用について聞き書きを行ってきた。しかし、その中で、話者の方々から動物に関する話を聞き取る機会も少なくなく、動物と人との関わりを中心に置いた聞き取りを行う必要性を感じるようになった。今回、沖縄国際大学で生物学の教鞭をとっておられた宮城邦治さん（1949年生まれ）に、出身である宜野湾市・大山における往時の自然利用について伺う機会を得た。宮城さんは哺乳類、鳥類の生態研究も手掛けてこられた方であることから、紹介される生物種についての情報は正確である。また、大山はタイモの生産地として有名であるが、宮城さんの話の中にあるように、かつてはタイモではなく稲作が中心であったという。このように、現在も農耕地の風景が残されていると思われる地域においても、自然利用や自然環境は往時と異なっている場合が多い。かつての大山の生物文化多様性についての宮城さんの話を以下に記録する。なお、聞き取りを行ったのは2023年12月28日である。

1・聞き取りの記録

一昔の動物と人とのかかわりについて教えてくださいませんか？

宮城：このエリアで生まれました。子供の時は、水田と広大なイノーが広がっていたんだけど、そこは子供の遊び場だった。沖縄では子供が野山で遊びながらいろいろ体験することを山学校というけど、大山の場合は、海学校というかんじだね。海と反対側には丘陵があったけど、ここは墓地で、あとは外人住宅があって。そういうところだから、当時のわんぱく小僧たちは、ちょっと言葉は悪いけど、盗みにいくわけ。珍しいものがあるわけだから。我々の居住地と外人住宅はセパレートだったけど、隣接はしていて、子供たちの遊びのエリアに含まれていた。例えば、欧米人はイヌを飼うでしょ。そのイヌが、普段見ないイヌだったよ。僕らの飼うようなシマイヌ……赤茶色の毛のやつ、じゃなくて、シェパードとかスピッツとかだから、見たら、もうびっくりして。そういう印象としてあるわけ。

覚えているのは、アメリカ人の住んでいる家の庭に、洗濯物干しがあって、その支柱がT字のパイプになってって、そのパイプの中にスズメが巣を作っていて、それを見つけるのが楽しみ。スズメの子を捕ったりね。スズメってこんなところに巣を作るんだと、幼い少年にとっては目からうるこの思い。そういうのが自分の原点にある。うちの住み場所は58号線の下にあって。小学校は段丘の上だけど、下は広大な水田。その頃はタイモじゃなくてイネを育てる水田だった。タイモは水田のわきでサブ的に育てられていて、これは自家消費用だった。1964年頃まで水田あって、我が家でも祖父が田んぼやってて、小1の頃から手伝わされていたから。水田のあったころ、稲刈りをした後、那覇からタニシを採りに来る人達がいるわけ。別にショバ代を取ることもなく、自由に採らせていたよ。ハイカラなのはアメリカ人で、猟をしていた。鈴をつけた縄の端を一人ずつが持って進んで、飛び出した鳥を別の一人が撃つ。撃つのは、だいたいバンだった。そうそう、脱穀機から稲こぎして、藁を投げ捨てるので、そこは藁の小山になる。4、5年生のとき、その上ではねていたら、藁の山の中からハツカネズミがでてきてね。これは捕まえられるけど、出てくるのが楽しみ。ちょっとした小川もあって、そういうところではフナを捕ったり。川には、ハゼ……ゴクラクハゼか、ボウズハゼか、そういうハゼのたぐいはイーブーといってたけど、その中に、口が大きくて底にペタッとくっつくのがいて、それはスップヤーと呼ばれてた。これは吸い付くという意味で、年寄りが「スップヤーんうんどー」と言ったりね。それをごそごそ捕まえて、盥に入れて見て喜ぶとか。祖父が5、6歳だったと思うけど、僕が初孫だから、田んぼからモクズガニとかオカガニを捕まえてくるわけ。オカガニはカンダクェーと呼んでいたけど、そういうのを捕まえてきて、孫にくれる。盥に入られたそのカニを突っついて遊んでいたら、指をはさまれて泣いたのを覚えているよ。昔の百姓は、畦の草刈をするわけだけど、チガヤの中にセッカの巣があると、殊勝なことに、巣のところを刈り残してやってた。わずかの刈り残しだけで、その後、セッカがどうなったかはわからんけど。まあ、思いやりがあったよね。僕らが小学3、4年のころ、学校帰りは海に行く。本当に広大なイノーだったよ。海に行く途中、畑でキュウリとか盗んで、海に放り投げて、そこまで泳いで行って、そこで一口齧ってまた投げて……そういうことをして遊んで。バンの巣を採るといって、まだイネが実っている中の田んぼにがさがさ入って、おじいに鎌もって追われるとか。あくたれ小僧だったわけだよね。魚釣りはよくしたよ。チンブクを適当に探してきて、糸も普通のミシン糸とかで。釣り針は売っていたけど。餌はヤドカリ。どんだけ捕ったか。まだ復帰前だから天然記念物にはなっていない頃の話だけど。それでガーラの子供を釣ったり。ガーラは釣りあげられると、クックッと鳴くので、クークーグワと呼んでたよ。あと、腹に模様のあるヤマトビーとか。貝も多かったな。イモガイとかタカラガイとかも採って。覚えているのは、海岸に漂着したバケツがあったこと。貝を採ったら、入れ物に入れて、炊いて食べる。このバケツがね、プラスチックだったんだよ。よもや融けるとは思わず、火にかけて。これ、1962、3年頃の話。多分、初めてプラスチックに出会ったときの話。ショックというか、「融けるー！」って。その頃は、漂

着物のない時代なわけだから。せいぜい流木とか海藻が流れてついているぐらい。普段は貝採ると、容器がないから、割って生で食べてたんだけど。こうした記憶が断片的に残っている。その頃は、畑のキュウリとか、スイカとかトマトとかも、子供にとっては野山の果物と一緒にようなもの。もちろん、見つければ怒られるけど。夜は夜で、頻繁には行かなかったけど、隣近所のおばさんが、イザリに行っていたし。

—タカラガイとかも食べていましたか。

宮城：タカラガイも食べる。ただ、一番食べたのは、マガキガイやクモガイ。クモガイはベーベンナと言ってた。なぜヤギとついているのかね。カンギクガイはシチャダンと言うね。あれはよく食べた。貝をつまんで膝で打って身を出したり、安全ピンで身を取ったり。キイロダカラなんかはシビリといていたけど、これは獲物という感覚はなかったね。時々、宇地泊に漁師がいてね。そこの人たちが網を張って。潮が引くと、取り残された魚が潮だまりにいたから、それを捕ったり。その中にいた、アイゴに刺されて泣きわめくとか。アイゴの子はスクだけど、これがイノーに入って、海藻を食べてちょっと大きくなったのはクサハマー。これがもっと大きくなるとエイグラー。アイゴも出世魚だよ。タイドプールでも釣りして、ベラとか捕って。でも、大山は百姓国だから、大人たちはウミンチュはよしとしてなくて、若い人で海ばかり行っている人は役にたたんどーとか、言っていた。

—イモリはいましたか？

宮城：イモリはいなかった気がする。大学に入って、南部に調査に行ったりしたときに見たんじゃないかな。イモリは地域によっては、ソージマヤーというでしょう。これ、清水守りという意味だよ。大山ではヤモリをソージマヤーと言うよ。逆に言うと、イモリがないから、ヤモリをそう呼ぶようになったんじゃないかな。

—陸の生き物の話も押してください。

宮城：キノポリトカゲは唐辛子を口に突っ込んで遊んでいた。キノポリトカゲは、アントウカーと呼んでたよ。あと、メジロ。自分たちで落とし籠を作ってた。2つ上の先輩が、メジロ捕りに行って、ハゼの木がわからずに登って、2、3日したら、全身かぶれて。これを見て、この木は登ってはいけないんだと学んだよ。我々の時代から、地域の中学校が統合されて、今の普天間小学校あたりにできて。その中学校に通うようになったら、そこが違う世界だった。まず、人の名前が違う。このあたりだと、宮城とか又吉とか5つぐらいの苗字しかないわけ。それが中学に行ったら、仲村、古波蔵、喜友名、島袋とかいてね。方言も違う。これは大山が独特な方言だからだけど、同級生の言葉がわかりづらかった。ここから歩いて2、30分の距離だけど。行きはバスに乗って、帰りは歩いて。途中、外人住宅があるから、何か盗んでみたり。今考えると恥ずかしい話だけど、その頃切手ブームがあって、外人住宅のゴミ箱をあさって、外国の切手をみつけると、そこをちぎって持ち帰ったり。

—ビーチャーは家に入ってきましたか？ あと、ビーチャーのふるまいで吉とか凶とかいう話はあったでしょうか。

宮城：土間には入ってきたね。ビーチャーがどうだから吉とかは、うちの祖父母は言わなかったなあ。ゴキブリはトービラーと言った。それで、ちっこいやつはヒーラー。トービラーに、「トー」がついているのは、大きいものにつける言葉だから。

—闘牛について教えてください。

宮城：小学5、6年生の頃は、大山にも闘牛場が2カ所あったよ。闘牛はカッシンと言う。これ、合戦という意味じゃないかと思う。闘牛は対抗戦なんだよね。大山は、メンダカリとシンダカリに分かれるけど、この対抗戦。レジャーです。それで、カッシンするから…と、財のある人がウシを買わされたりする。みんなで楽しむためにね。もともとウシは農耕用のものだったろうけど、大正時代以降は、専用のウシが飼われるようになった。大山は、今はもう、やっていない。やっていたのは、70年代まで。復帰した後、文化的なことが一つ、一つ変化していったから。中学の頃は帰る途中、牛舎を覗いて「あー、すごいねー」とか言っていたけど。ウシの名前も、もともとは、毛色や角の形、技や大きさなんかで突けられていた。例えば、角がとがっているから、何とかトガイーとか。技の名前から、なんとかカキヤーとか。毛色を見て、なんとかアヨーとか。アヨーというのは、アヤ……模様のことだね。闘牛ブームがあったのが1960年代。その頃からスポンサーがつくようになって、ウシの名前も変わって行って、ベプシ号みたいに、スポンサーの名がつくようになった。

—闘鶏もやられていましたか？

宮城：闘牛は大がかりで、大勢の人が見る中でやるものでしょう。だから、公的な側面が大きい。それに対して闘鶏は個人の家の中でもできる。だから狭い世界できちやうわけ。闘鶏はタウチーオーラセーと言うけれど、ギャンブル的な要素が大きい。極道者が関わっていたりする。一般人の世界じゃない。このあたりでもタウチーを飼っていた人いたけど、若い時から遊び人風だった。ただ、闘鶏自体は古くからある遊び。琉球王国時代は士族がやっていたりしたみたい。世界的にも広くみられるものだしね。フランスも盛んだったし、フィリピンとかでも盛んだし。競馬は盛んだった。明治頃の沖縄には馬場が結構あって。競馬は闘牛と違って、ウマ同士が傷つけあうことないから。どっちかという、サーカス的な見世物。その頃のウマは背の低い在来馬でね。それで、沖縄の一般の人たちに聞くと、たぶん、宮古や八重山がどこにあるかは大体わかっているけど、奄美や徳之島といった島々、どこにあるかもあまり意識していないような気がする。琉球列島でも、北の島々のことを知らない。ところが、闘牛をやっている連中は「次は与論だね」「次はエラブだね」と言ったりする。闘牛は庶民の世界の文化交流だと思う分け。かつての琉球文化が、そういう形で残っている。闘牛を通して、現在もかつての琉球の島同士の交流がある……と。一部の人だけど、自分たち以外の琉球の人たちがいることを意識している。徳之島に闘牛を見に行ったついでに、地名とかを聞くと、沖縄と似ているのに気づくわけ。やっぱり、基層は琉球だなと。

—田んぼのトーナジャー(タウナギ)とかを食べましたか？

宮城：トーナジャーを食べたかは、微妙だな。ちなみにトーナジャーは大山ではトーンナ
ガーと言うよ。大山言葉は、口蓋化しないっていう特徴がある。だから、ヒジュールはヒ
グルーというし、ニービチはニービキ。わかりやすい例は、チュラサンがキラサンになる。
大山言葉を伝える最後の世代が僕らぐらいの世代。だから、意識的に大山言葉を使うよう
にしているよ。ウチナーグチというのは、概念が広いよね。自分たちの生活の中で使われ
ていたのが、シمامニーよね。何が残せるかわからんけど、いろいろ種を撒いておきたい
と思うよ。

—今日は、おいそがしいなか、ありがとうございました。